

「人文の知」に学ぶ

信越支部長 宮澤正幸



最近の朝日新聞のコラムに東大名誉教授の世界的免疫学者で「能」作者、文筆家でもある多田富雄さんのお話が掲載されました。このコラムで多田さんは日本を特徴付ける要素として「アニミズム」の文化、豊かな「象徴力」、「あわれ」という美学、それらを技術的に包み込む「匠の技」の四つを挙げています。俳句、和歌、能、歌舞伎、茶道、華道など日本の芸術文化を支えてきた科学とは程遠い「象徴力」、普遍的な言語では容易に言い表せない「もののあわれ」や「匠の技」、これらの日本文化のあいまいさと西欧文化の明晰さとの間で日本の科学者は戦っていると述べています。その多田さんは昨年、建築家や狂言師を運営委員に含む「自然科学とリベラルアーツを統合する会」を立ち上げたそうです。近年の科学技術の問題が科学者だけでは解決できないため、「人文の知」と「科学の知」とを統合し、より広い、より深い、より遠い視野で近代の科学技術の問題を眺め、解決する方法を考えようとのこと。このような理念の元となっているものは「能」であり、この中に日本文化のあらゆるものが詰まっていると述べています。

私は企業の研究所から教育現場へ転進してから、謡曲と仕舞とを学んできました。宝生能楽堂で能「羽衣」を演能し、能管も少し経験しました。現在は謡曲教授の免状を頂き、大学の能楽同好会で学生に教えることも楽しみの一つとなっています。俳句についても同人誌「夏木」の会員として作句していることから、多田さんのお考えに共鳴するところが多々あります。確かに能には日本文化にかかわる多くの示唆が含まれているような気がします。能は抽象化された空間で演じる舞、謡、囃子により観客の脳裏に幽玄をありありと表現する舞台芸術です。簡素化された所作と間(ま)の持つ不思議さには大変な興味を覚えます。更に、この所作と時空とを体系化し、能楽各流儀が極めた技術を具現化する能の世界に比類ない科学的なシステムの趣を感じています。また、俳句は自然と作者の心の接点をずばりと17文字で表現する文学です。背景に能のような明示的な要素がありませんからその解釈はすべて読者にゆだねられます。あえて能と対比すれば、俳句こそが日本的な要素を集約した人文的なシステムであり、多くの示唆を含んでいるような気も致します。

私たちが専門とする情報通信システムは欧米社会と歩調を合わせ今日の社会、経済活動になくてはならない存在となりましたが、サービスの提供法とシステムの活用法とにたくさんの問題を抱えています。顕在化している問題には司直の手にゆだねるような問題や青少年の健全な育成を妨げるような問題などがあり悲しい限りですが、その責任の一端はシステムを提供する私たちにもあるのではないかと気掛かりです。システムの実現では経済性、効率性の追求は大切な要件ですが、更に優先される要件として利用者の利便性と安全性とを合わせて保証したサービスの確保があると思います。サービスの定義は大変難しい作業ですが、私はこのサービスの概念整理に能や俳句のシステムとの類比が役立つものと考えています。能も俳句もサービス定義がきちんとなされています。それゆえ、高邁なシステムとして継承されているものと考えれば、これら問題解決のために私たちから日本の人文分野への関心を示し、学び、連携について模索することが有効で、大変意義深いものと思います。「人文の知」を得て創生されるサービスは、私たちの将来の生活、教育、文化活動を豊かにする新しいシステムの出現を約束してくれるものと信じています。